貴族令嬢、転生5秒で家出します。

目指せ、ソロ活山暮らし

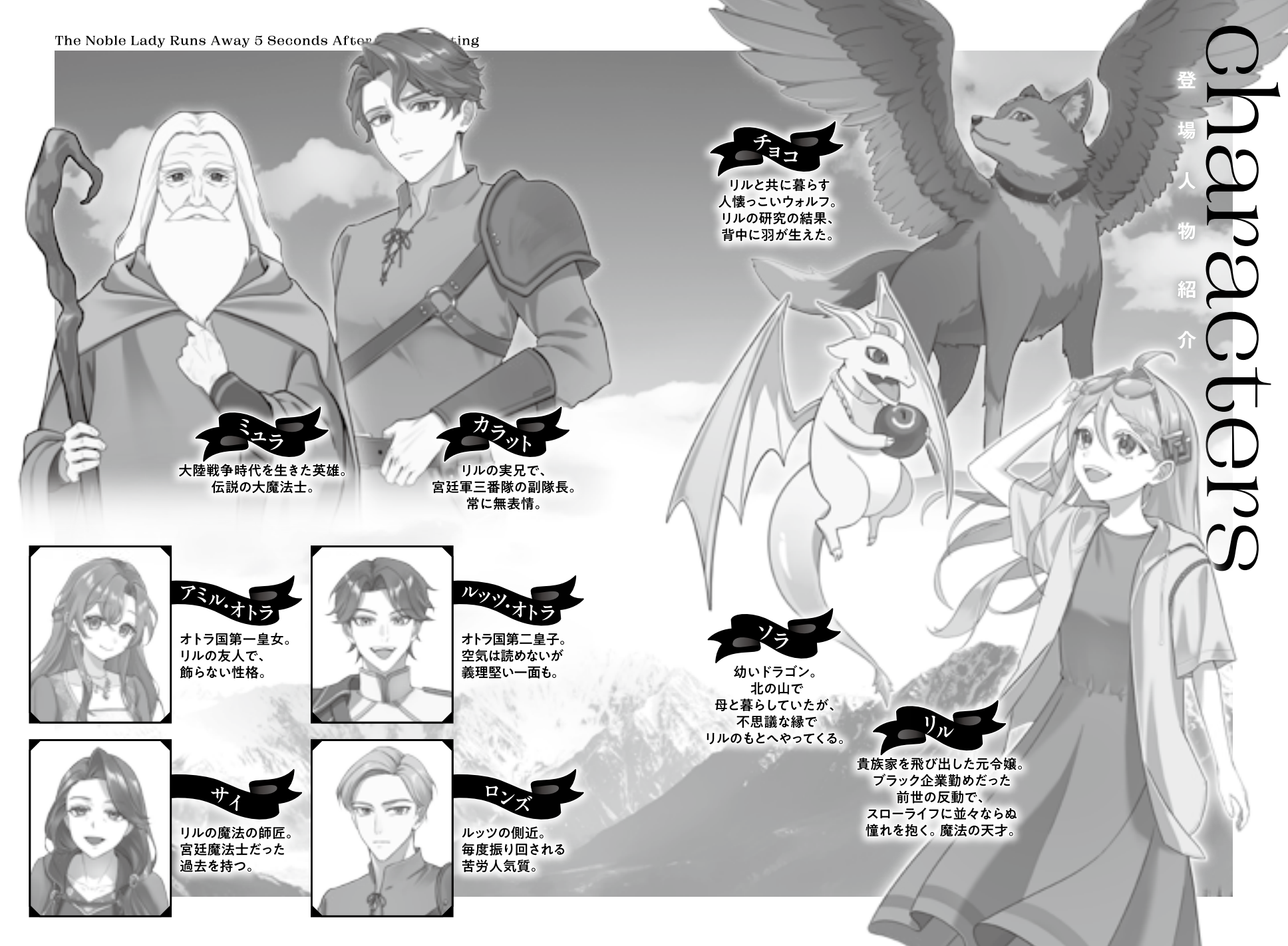
伊野瀬凛 Rin Inose presents
Illustration ふくよかなクマ

2

The Noble Lady
Runs Away
5 Seconds
After Reincarnating

characters

登場人物紹介



ミユラ

大陸戦争時代を生きた英雄。
伝説の大魔法士。

カラット

リルの実兄で、
宮廷軍三番隊の副隊長。
常に無表情。

チョコ

リルと共に暮らす
人懐っこいウォルフ。
リルの研究の結果、
背中に羽が生えた。

ソラ

幼いドラゴン。
北の山で
母と暮らしていたが、
不思議な縁で
リルのもとへやってくる。

リル

貴族家を飛び出した元令嬢。
ブラック企業勤めだった
前世の反動で、
スローライフに並々ならぬ
憧れを抱く。魔法の天才。

アミル・オトラ

オトラ国第一皇女。
リルの友人で、
飾らない性格。

ルッツ・オトラ

オトラ国第二皇子。
空気は読めないが
義理堅い一面も。

サイ

リルの魔法の師匠。
宮廷魔法士だった
過去を持つ。

ロンズ

ルッツの側近。
毎度振り回される
苦労人気質。

これまでの物語

とある貴族、ノーバー家の令嬢であったリルは、突如として家出した。
彼女の前世はブラック企業勤めで過労死した日本の会社員。その記憶がよみがえったのだ。
今世では父に冷遇され、愛してくれた母はもう亡い。
だったら自分だけで自由に生きよう！　そう思い立ち、記憶が戻った直後に家出を敢行した。
高名な魔法士サイのもとで四年程修業したが、彼女がリルを宮廷魔法士として推薦しようとしたため、ウォルフのチョコを連れて逃亡し独り立ち。山奥にこっそり家を建てて自給自足の日々を始める。誰にも邪魔されず、好きな時間に起きて好きなことをする――これぞ至福の暮らし。ところが、二人の訪問者が原因で徐々にスローライフが脅かされていく。
オトラ国第二皇子ルッツとその妹アミル。彼ら兄妹は半ば強引に一緒に山で過ごし始めた。はじめこそ迷惑に思っていたものの、リルもまた、純真な彼らに心を開いていく。
隣国キースが侵攻してきた際にはリルとチョコが力を貸し、見事撃退に成功した。

そんなある日、リルはアミルに頼まれ宮廷に赴くことに。パートナー必須のお茶会で彼女の婚約者のかわりを務めてほしいという依頼だった。リルは魔法で男性に変身してお茶会をやり過ごす。役目を終えた彼女は、ルッツに門まで送ってもらう道中、ふと気になる男を見かけた。

どこかで見かけた覚えがあるのに思い出せない。実家にゆかりのある人物のはずだが――

リルの胸が不安でざわつく中、ルッツは教えてくれた。男の名はカラット・ノーバーだと。

第四章　ノーバー家

リルは顔色を悪くさせた。

カラット・ノーバーという名前をリルは知っている。貴族であるノーバー家の長男で、つまるところリルの兄である。

こんなところで見かけるとは思わなかった。転生したことを自覚してから一度も会うことはなかったので、このまま一生を終えるものとばかり。実家に住んでいた頃も、彼とは数える程度しか顔を合わせなかった。

まさか、宮廷軍に所属していたとは。しかも、五番隊まであるとはいえ副隊長などしているのなら、おそらく優秀なのだろう。

――カラット兄様は八歳違いだった気がするから、二十二歳くらいかな。

そろそろ、家督を継ぐ話は出ているだろうか。継ぐとなると、宮廷軍を退役するのだろうか。継いだ後も軍に所属するとしたら少々厄介だ。あちらもリルの顔を覚えていない可能性はあるが、名前を知られたらバレるかもしれない。

――ここは知り合わないに越したことはない。まあ、宮廷に所属していない私が軍の人と知り合う機会なんてないだろうし大丈夫でしょ。

なんだかフラグを立てるような言い方だと思いつつ、宮廷の門まで送ってくれるというルッツに適当に相槌を打ちながら宮廷を出た。

「今日は本当に感謝する。また改めて礼と、野菜の定期契約について話をしに伺おう」

「はい。お待ちしています」

笑顔でそう答え、ルッツと別れる。宮廷を離れた瞬間、リルは真顔になると、足早に皇都を後にした。皇都を出てからも変化魔法を解くことなく、山の麓まで向かう。周りに人の気配がないことを確認してから、本来の姿に戻り、勢いよく飛んでチョコの待つ家に帰った。

「チョコ、ただいま！」

「ギャオッ」

畑の周りで飛び回っていたチョコが体当たりしてくる。今は本来の大きさをしておりかなり重いのを知っているので、あらかじめ体を強化してから受け止めた。チョコは尻尾を千切れんばかりに振ってくる。たった数時間離れ離れになっただけでここまで嬉しそうに出迎えてくれるなんて、家族としてとても嬉しく思う。

「今日は疲れたよ。チョコとゆっくりしたい」

「ガウ」

「一緒に空でお昼寝しよっか」

山の上をふよふよ浮きながら寝転がる。

「ルッツ様が細かいことを気にしない性格でよかった」

先ほどカラットのことを尋ねたのは不用意であったが、全く突っ込まれず安心した。宮廷に関係のないリルが急に宮廷軍に興味を持ったと思われたら大変だ。もしくは、やはり宮廷魔法士になってくれると期待させても可哀想だ。

以前サイが書いた宮廷魔法士の推薦状は正しく取り消され、現在リルは自由の身となっている。そのことに対してルッツは何も言わず、前と変わらない態度で接してくれている。

チョコとのんびりした後、リルは久しぶりに、別荘地として買ったカル島へ行くことにした。牛に似た魔物の肉――コウ肉を手に入れるためだ。

魔法陣の上に立ち、魔力を注入する。一人と一匹の姿は消え、あっという間にカル島に着いた。

「オッケー、空間魔法の調子もバッチリ」

カル島の魔法陣を出て歩き出す。別荘の前に立ち、リルは不敵な笑いを浮かべた。

「ふっふっふ、正式にこの島は私の土地になったから、表札を堂々と付けられる」

魔法袋から可愛らしくデザインされた表札を取り出す。それを地面に刺し、腰に手を当て家を眺

めた。
「うんうん、良い感じ。チョコ～、ほら、ここにチョコの名前も書いたからね。私たちの家ってことだよ」
「ギャオ～ッ」
テンションの上がったチョコが嬉しさのあまり表札を前足で蹴りつける。その勢いで、表札に爪痕が付いた。
「ギャ……」
失敗したとばかりにチョコがリルの顔色を窺う。ぶんぶん振っていた尻尾も元気をなくしてぺたんと地面にくっついている。リルがしゃがみ、チョコの顔を間近で見つめて言った。
「大切な物を触るときは気を付けようね。でもこれ、チョコの印って感じでいいよ！　迫力が増した、ありがと」
「ギャオッ」
チョコがリルの周りをグルグル走る。リルは腹を抱えて笑った。
リルはチョコが遊び場で遊び出したのを確認して、家からテーブルと椅子を引っ張り出す。その上に魔法書を置き、テーブル横の地面に小さな魔法陣を描いた。
「人間感知器、そろそろ作ってみよう」

以前、特別記念物のアディという魔物を観察しに、ルッツやアミルと出かけたことがある。その時に密猟者と一悶着あったため、アディの住処に人間が近寄ったら分かるように、何らかの魔法具を開発するとルッツに約束したのだった。
開発を思い立ってみたものの、人間感知器を作るのは難しいということがすぐに判明した。魔力感知器は魔力が対象なので簡単だ。しかし、人体となると、何を感知させればいいのか分からない。
前世の世界に存在する人感センサーのように、何かが動いたら反応するものなら作ることができる。ただ、人間だけではなく動物など全てのものを感知してしまう。
「困った。安請け合いしちゃった」
魔法を使えない人間には少し魔力がある者と、全くない者がいる。魔力感知に絞っても対象に漏れが出てしまう。リルは立ち上がり、うろうろ歩き始めた。
「ガウ」
「あ、ごめん。ちょっと考え事」
普段しないことをしているので、チョコが不思議そうな顔で寄ってきた。リルが両手を振りながら説明する。
納得したチョコが遊び場に戻っていく。リルは座り直し、魔法書をぱらぱらとめくった。
「簡単だと思ったんだけど……人間にあって魔物や動物に無いもの……」

リルははっと顔を上げる。
「形で判断したらいけるかも」
魔物にはいろいろな形があるが、二足歩行の魔物は極めて少ない。ゴブリンは例外的に二足歩行であるが、もしもあそこの湖にゴブリンがやってきたら、人間以上にアディの敵となりうるので、感知させた方がいいだろう。リルは魔力ではなく形に反応するよう、魔法書を片手に感知器の作製に取り掛かった。
「今回の対象は魔力じゃないから、熱に反応するようにしよう。それで形を把握して、二足歩行のものを登録しておく。それに近いものが湖に近づいたらアラートを出す」
まず、感知器となる「物」が必要だ。見た目は何でもいい。そこに魔力を注ぎ込むので、それに耐えうるものであれば形状は関係ない。リルはその辺にあった木箱を手に取った。
「木箱なら素材的にあそこにあっても目立たないからよさそう」
魔法具の作製は経験が浅く、魔法を開発するよりやや時間がかかる。今まで魔法具を必要とする人間と交流してこなかったからだ。魔法士二人暮らしでは、魔法具に頼る機会は全くなかった。
これは一人になってからも同じだ。環境が変わり、必要なものが増え、魔法への解像度が上がる。良いことである。
「ふふ、防犯カメラみたい」

前世と共通点のあるモノ作りに作業が捗る。鼻歌を歌いながら、仕上げに、簡単に壊れないよう木箱に強化魔法を施した。小瓶がじゃらじゃら入っている箱からガラス玉を一つ取り出し、それと木箱を共鳴させる。これでアラート受信機の完成だ。
「出来上がり」
リルは立ち上がって、テーブルの上に置いた感知器の前を通った。すると、持っていたガラス玉が「ピコーンピコーン」と音を鳴らす。楽しくなって何回か往復する。
「成功成功！　次ルッツ様たちに会ったときに渡そう」
まるで、子どもが初めておもちゃ作りをしたようにはしゃいでしまった。自分の努力がこうして物理的に残るのは純粋に嬉しいものだ。リルがはっとして顔を上げる。
「そっか。湖にはここからでも行けるから、一人で行って先に設置しておこう。それで、受信機は後々渡せばいいや」
山に帰れば、アディの休憩地はすぐ近くだ。リルがチョコを呼ぶ。
「チョコ。そろそろ帰る準備しようか。私はコウを解体するからちょっと待ってて」
「ギャオ～」
遊び場の近くに、コウを飼う広場を作ってある。そこから一頭選んで解体することにした。
解体の仕方は魔法書に載っていた。魔物の食べ方という頁だ。例になっていた魔物はコウではな

かったが、冷却魔法で瞬間冷凍し、そのまま解体、冷却魔法袋で保管という形だった。
詳しい解体については、スライスの方法が書かれていたのでそれを参考にする。血が飛ぶと厄介だと思ったが、最初に冷凍するためそれは杞憂に終わった。
「ありがたく頂戴いたします」
魔法袋に収納する前、リルは手を合わせてコウに礼を言った。
「おまたせ」
チョコを振り返ると、まだ元気に走り回っていた。リルがチョコに近づいて言う。
「帰るよ」
「ギャオ～」
先ほどと同じ調子で返事をするチョコ。どうやらまだ帰りたくないらしい。幸い、まだ陽は高い。
リルはチョコに付き合うことにした。
「じゃあ、おやつを食べて、少し探索したら帰ろう」
「ギャオ！」
チョコがぶんぶん尻尾を振る。
カル島は普段見かけない魔物だらけの島なので、チョコにとっては格好の遊び場といったところだ。島で自由に遊んでいいと言ったら、一日中戻ってこないかもしれない。

「いつもは私の予定に合わせてくれてるから、こんなときもないとね。前回行っていないところを探索しようか」
一人と一匹でどんどん森を進んでいく。
自分の土地として周りを気にしなくていいのは、大変喜ばしいことだ。
思いがけない幸運だったが、また違う別荘を作りたくなったら、カル島を手に入れた時のようなクエストを見つけるのも手だろう。
陽が傾き始める頃ようやく山に戻り、家の床にごろんと寝転がる。休憩がてら購入した地図を見ることにした。
「しばらくは用事も何もないから、地図を片手に旅をしてみるのもいいね」
リルはオトラを出たことがない。どうせなら違う国に行ってみるのもいいかもしれない。敵対しているキースには斜線を引き、その他の国を眺める。
「結構いろんな国があるんだね。海も広い。でも、キースみたいに争いも起きるとすると、地図っていつの間にか変わるのかな」
不便なことだと思うが、もしも地図が変わっていたとしても気が付けないので、このままこの地図でのんびり旅をすることに決めた。
「いつ旅立とう。って言っても、すぐ戻ってこられるけど。寝る場所はいつもの家でもいいし。い

ちおうルッツ様たちには報告しておこうね」
リルはチョコと顔を突き合わせて今後の予定を決め始めた。
ルッツとは定期的に野菜を渡す約束をしているため、彼と連絡ができる魔法を開発することにした。アディを守るための感知器を作ったことで創作意欲が湧いてきた。
「短い会話ができる魔法弾があるくらいで、電話はないみたいだから、電話に似た魔法具を作ればいいか。テレビ電話みたいなやつがいいな」
声だけだと分かりにくいこともある。しかし、実際会うのは面倒だ。両方を解決してくれるのがテレビ電話だ。顔を見せるのが嫌なときは音声だけにしたらいい。
「相手の映像を観るだけなら、遠隔操作で私の目の役割をするものを作って飛ばせばいいけど、お互いにいつでもってなると、宮廷と私の双方を繋げる魔法板みたいなのを作った方が早そう」
一通り悩んだところで、電話というものを発明した人は素晴らしいという考えに行きついた。
「とりあえず、難しそうなのが分かっただけいいや。なんかやる気出てきたぞ～、そういえば、難しいことをするの好きだった」
生前元気だった頃のことを思い出しながら、リルは開発に励んだ。
初めに魔法板を二つ作ってみたが上手くいかなかった。
そこで、今度は一つの魔法板を二つに割り、そこに自身の魔力を注入した。すると、板が鏡のように目の前のものを映し出した。もともと一つだった板はお互いを感知し合うので、板に映った者同士が認識できるようになった。板を両手で持ってまじまじと見つめる。
「おお、出来た」
試しにチョコの前に板を置き、リルが庭に出てもう一つの板を覗き込んだ。そこには全面に映し出されるチョコの顔があった。
「あは、めちゃくちゃ可愛い！　成功だね！」
部屋に戻って実物のチョコを抱きしめる。ふわふわな体はリルより二回りも大きい。まだ少しずつ成長しているので、もっと大きくなる可能性がある。
「でも、これだといつでも映るのが難点だなぁ。必要なとき以外は電話してほしくない」
できれば野菜の定期契約専用にしておきたいので、改良の余地がある。
「電源ボタンみたいなものがあればいいんだけど」
机の上に置いてある、サイからもらった魔法書を手に取る。今まで沢山の魔法を開発してきたが、基本の魔法こそ侮れないと思う。それらを学び、使い、応用すると、可能性は無限に広がっていく。
電源も基本の中にヒントがあるかもしれない。
「指先で触れたものを強化させる……このあたりかな」
常にオフ状態にしておき、記憶させた指で触れたときのみ板に蓄えられている魔力を発動させる。

これならば、誰かが覗き込んだり触ったりしても発動しない。リルは魔法板に電源機能を追加した。
今日の夕食はコウ肉の巨大ステーキにした。しっかり手を合わせて頂く。チョコも大喜びだ。
チョコは魚を好まないため普段はリルの魔力をもらっているが、コウ肉は別らしい。
「これは五百グラムくらいありそう」
欲張って食べきれない程の大きさにしてしまったが、今日は沢山働いたので二十分で完食した。
明日はみっちり運動しようと思った。
食後、いつでも寝られる状態にして床をごろごろ転がる。ベッドもあるのに、こうして床にへばりつくのが堪らない。
「明日からは旅立ちの準備をしつつ、畑の調整しないとね。畑に結界を張って、その中の気候を安定させておこう」
山にいる時は気分転換に畑の世話をしているが、結界を張っておけばリルが世話をしなくても野菜たちは成長していく。
「どこ行こうかな。どこでもいいってなると、なかなか決められないな」
今の自分には家と別荘があり、何より時間がある。余裕があるからこその贅沢だ。無限に広がる可能性にリルはニヤニヤ笑いが止まらなかった。

翌日、畑を見守りながらリルは地図を広げた。リルはオトラ国を出たことがなく、その中でも皇都と山、カル島しか知らない。改めて考えてみると、驚く程に引きこもり生活を送っていた。
かといって、これが嫌なわけではなく、一人のんびり生きるのを望んでいるのでこのままでいいと思っている。
「今後の人生をさらに面白くするために、ちょっとスパイス入れてみるのもいいよね」
旅はそのスパイスだ。カル島は良い買い物をした。世界は広い。もっと様々な場所を見て、気持ちの良い場所に追加で別荘を建てるのもいい。
「小さなものでいいから、いろんなところにのんびりできる家を作るの、楽しいかも」
今のところオトラ国を出るつもりはないが、オトラ国に限定してもかなり広く、北方には全く行ったことがない。
「しまったなぁ。名産品が載っている方の地図を買えばよかった」
日本から植物をもらい野菜を育てているため、この世界の野菜にはまだ詳しくない。サイのところにいた頃は数種類の決まった野菜しか食べていなかった。名産品が書かれていたということは、それなりの種類が存在するに違いない。
「見つけたものを自分で地図に書き込んでいくのもいいか」
知らないことを知っていく方が楽しいこともある。ウォルフは百年以上生きるらしいので、一人

と一匹、まだまだたっぷり時間はある。終わりを気にせず、着の身着のまま生きていきたい。
「ふふ、おばあちゃんになるまでにこの地図がカラフルになるといいな」
何も分からずこの世界に生まれ、何も考えずにここまで来たが、小さな目標が一つ出来た。
「じゃあ、まずオトラ国で行ったことのない地域に行ってみよう」

「あ、魔法陣作らないと行き来できないんだった」
二日後、出発準備をしていたらそんなことに気が付いた。毎日寝に帰るつもりだったが、人気のある見知らぬ土地に魔法陣を作って放置しておきたくない。
「魔法陣に結界を張って、周りからは見えなくさせて、次の日戻ったら魔法陣を消しておく……かな。面倒だけど、このくらいはしておかないと外の世界はどれだけ危険か分からないから」
魔法陣の安全が確認できない場所なら、いっそそこで一泊してもいいだろう。夜にしか分からない発見があるかもしれない。
「夜行性の魔物とかも沢山いるんだろうなぁ。カル島ではいろんな魔物に会えたけど、可愛い魔物にも会ってみたい。もちろん、チョコが一番可愛いけどね」
「ギャオ！」
チョコが背筋をピンと伸ばす。リルの横にはいつもチョコがいた。これからもそうだと信じている。種族を超えた友情がここにはある。
「さて、ここに魔法板のテレビ電話と説明書を置いておけば、ルッツ様たちが来ても分かるでしょう」
家の前に魔法板を置く。ここには三人しか訪れることができない。信用のおける人たちだから悪いことには利用しないだろう。ただし、プライベート空間は守りたいので、家の結界はしっかり張っておく。
「念のため、防犯カメラも置いておこう」
防犯カメラもとい魔力感知器もドア横に設置した。これは魔力を感知したときのみ発動し、発動中はカメラの役割を果たしてくれる優れものだ。魔力感知器の作り方は魔法書に載っていたので、そこにカメラの役割を付けて新しい魔法具にしてみた。
家の中にはリルが開発した魔法具や開発メモがあるので、念には念を入れておく。
「おまたせ、チョコ。行こうか」
「ギャオ」
一緒に空へ舞い上がり、まずはオトラ国の北へ向かった。
皇都の上空を抜けると、舗装された道からだんだんと荒れた道になっていく。やがて小さな街が見えた。そこを過ぎたあたりでリルが腕をさすった。

「ちょっと寒くなってきたかも。上着着よう。チョコは平気？」
「ギャオギャオ」
「そっか。チョコの毛、ふわふわで暖かいもんね」
上着を着る前にぎゅっとチョコを抱きしめる。太陽の匂いがした。夏はこれではとても暑そうだが、実際には夏も元気に走り回っていたので平気らしい。
サイからもらった上着を羽織る。リルが今の生活で着ている服のほとんどはサイがくれたものだ。彼女のお古だそうだが、丈夫なのか、今のところ少々のほつれだけで済んでいる。
「そろそろ……あ、見えてきた」
初めての旅ということで、せっかくなので最北端を目指すことにした。カル島がかなり南に位置しているため、反対の場所をという安直な理由だ。遠くの方に家がいくつか現れた。リルは地上に降り、そこから街の入口らしき門の右側に広がる森に入っていった。
「珍しいのいるかなぁ」
リルの興味の対象は人々ではなく植物や魔物だ。街に入るより、森の方がずっと有益なものが手に入る。見たことのない植物を探すべく、どんどん森の奥へ進んだ。
森は寒く、暗かった。厚手の上着を着てもやや寒いくらいだ。
「わあ、スライム」

すっかり見慣れたスライムに笑みをこぼす。リルが住んでいる山にはスライムが多く生息しており、散歩に行くと、運が良ければスライムの行列に出会えたりする。
「スライムがいるってことは、比較的平和なのかな」
すぐ傍に街があるのもそういう理由かもしれない。カル島との違いは明白だ。あそこは人が住んだ形跡すら無かった。試しにスライムを追ってみる。すると、小川に到着した。
「わ、魚がいる。美味しそうだけど今は我慢」
さらにスライムの後に続くと、広場に出た。そこには何匹か小物の魔物がいて、見ているだけで癒される光景だった。
「ここは太陽の光が当たって暖かいから集まってるんだ。良いお昼寝ができそう」
リルはおもむろに魔法袋から携帯用の布団を取り出した。薄いのでベッドよりは劣るが、昼寝なら十分な代物だ。
「チョコも寝る？」
言われたチョコが軽く首を横に振る。そして森の奥へ消えていった。リルは気にせず布団に横たわる。布団の周りにはしっかり結界を張った。
「外でお昼寝って気持ち良いんだよね」
結界内の気温を調節することもできるが、あえてそのままにした。やや肌寒いものの、布団を

被ってしまえば気にならなかった。
そよそよと風が吹く。こちらもまた、山に劣らず空気の澄んだ場所だ。リルはスライムたちのぽよぽよした足音を聞きながら眠りについた。
「ガウガウ」
「あっごめん。おはよ」
しばらくして、散歩に飽きたチョコがリルを起こした。ちょうど陽が真上に差しかかっていた。布団を片づけ、結界を解く。
この森の寝心地もとても好かった。地図に二重丸をしておく。もっと寒い季節になったら遊びに来られないが、それまではオトラ国お散歩コースの候補に入れておくことにした。
チョコと一緒に森を探索する。珍しい魔物は見られなかったが、綿に似た植物を発見した。リルが瞳を輝かせる。
「布団とかクッションとかに使えそう！」
これを量産すれば、カル島からひそかに引っかかっていた悩みが消える。思いがけない幸運に、ウキウキしながら綿のようなものを採取して魔法袋に入れた。
「本当に綿かな……」
うっかり触ってしまったが、綿に似ている毒のある植物だったらと不安になる。だがいちおう魔法薬があるので大丈夫だろう。
ちなみに、万能薬を魔法板とともに置いておこうかと迷ったが、止めておいた。ルッツが見つけたら驚くに違いないのでドッキリプレゼントをしてみたいところだが、いくらリルが作ったものといえど、信用せず持ち帰らない可能性もある。今度会えたら直接説明することにした。
「一定時間毒耐性がつく魔法薬の作り方がどこかに載っていた気がする」
家にあった魔法書を思い起こす。しばらく読んでいないものもあるので、帰宅したら読んでみることにした。
「知らない場所に出かけるんだから、魔法薬をいろいろ作っておいた方がよさそう」
今後必要そうな魔法薬の名前をメモし、チョコに声をかけようとしたところでリルが後ろを振り返る。すると遠くから複数の足音が聞こえてきた。咄嗟に身を隠す。少しして、オトラ国の兵士が数人通り過ぎていった。
――なんでこんな森の中に兵士が？　これもパトロールの一環？　皇都から離れているから三番隊ではなさそうだけど。
兄が所属している隊でなければ、すれ違っても問題ない。むしろ、隠れているところを見つかった方がまずいことになる。兵士がいなくなったことを確認し、リルは堂々と歩き始めた。
「探索の続きはまたあとでかな。とりあえず、良さそうな広場と綿みたいな植物を発見できたから

この辺で」

森を抜け、迷った結果、街へ入ることにした。せっかくここまで来たのだから、少しくらいは街の様子を見てもいい。ただの気まぐれだった。リルはすぐに後悔することになる。

――うそうそうそ……ッ！

街を入って真っすぐ歩いたところで、オトラ宮廷軍三番隊が向こうから歩いてきた。まさか、皇都周辺を守っているはずの部隊がこんなところにいるなんて。何故三番隊と分かったかというと、先頭にカラット・ノーバーがいたからだ。

さりげなく近くの店に入ろうかと思ったが、住宅街らしく、店はまだ先にあった。これでは隠れる場所がない。街に入らなければよかった。

――いや、兄様とは五年以上会っていないし、家にいた頃も全然帰ってこなくて顔を合わせなかったから、私の顔なんて忘れているはず。

顔が父親似のカラットだから、性格も受け継いで家族に興味がない可能性もある。呼吸を整え、なんでもない顔をして三番隊とすれ違う。その瞬間、カラットが目を見開いてぐりんとリルに向き直った。

その顔があまりに恐ろしくリルは大声を上げそうになってしまった。チョコなんて一鳴きしてしまった。

「失礼しました」

チョコが兵士に向かって吠えたことを謝り、目を合わせないようその場を離れる。背中にも視線を感じる。というか、視線が近づいてくる気がする。恐る恐る振り返ると、カラットが早足で追いかけてきていた。

「わぁぁあああッ」

リルは駆け出した。チョコは尻尾を振ってついてきた。カラットもそれに合わせて走り出した。

「やばいやばい！」

こうなったら人目を気にしている場合ではない。慌ててチョコをかかえ、空へ舞い上がった。カラットが叫ぶ。

「リル！」

リルの恐怖が絶望に変わった。

「カラット兄様にバレたぁ！」

◇

絶望の街から飛んで十五分、リルは木に寄りかかって息を整えていた。

「絶対怒ってたよね……」
家出してから五年以上、安否を知らせる手紙を出さなくなって数か月。こちらの情報がノーバー家に渡るようなことはしていないが、皇都でもリルを捜す張り紙を見ることもなく、てっきりリルの存在は忘れ去られたかと思っていた。
「兄様が近くにいないか確認しておこう」
魔法玉を取り出し、そこに右目を投影する。それを飛ばし、付近を捜し回った。街の中で三番隊を見つけたので、そこの先頭へ行くとカラットが無表情で歩いていた。
「そうそう、兄様はいつもこんな表情だった。あとお父様、も……お父様だ!?」
カラットの横にはリルの父であるザラ・ノーバーがいた。なるほど、今回三番隊が遠征したのは、どうやら彼が関係しているようだ。
「もしかして、ノーバー家ってわりと高い地位にあるのかな。全然知らなかった」
メイドの他に、勉強や魔法学を教えてくれる教師がいたので、恵まれているとは思っていたが、これは想定以上だ。
「魔法学ってみんなが学ぶものじゃないもんね。それを十歳の子に教えてくれていたのを考えればそうか」
リルが腕組みをして唸る。

「お父様が遠征するから護衛としてついてきたってこと？　軍を動かす程の家だとは……流されて宮廷魔法士にならなくて本当によかった」
もしバレて連れ戻されでもしたら、自由気ままな生活が終了してしまう。それは絶対に避けなければいけない。
「今回のはカラット兄様の見間違いってことになるまで、しばらく皇都には寄り付かないようにしよう」
幸い、ルッツたちと会わずともコミュニケーションが取れる魔法具を開発したところだ。皇都に行く用事もない。リルはチョコとともに少し南へ行き、森や山を探索して回った。
「兄様とお父様があそこにいるってことは、逆に考えればあそこ以外は大丈夫ってことだ。じゃあ、とりあえず慌てることはないね」
ルッツたちから連絡もないので、まだ山を訪れていないのだろう。リルはのんびりと旅初日を楽しんだ。
せっかくなので、その場で野営することにした。山に帰らず、知らない場所で一人、作戦を練りたいというのもある。
「まずは、兄様には百パーセントバレたと考えていい。問題は兄様が当主であるお父様に報告しているかどうか」

カラットは普段宮廷にいて、父親と会うこともない。今回の遠征で報告をしなければリルの生活が脅かされることはない。万が一報告していたとしてもあの父親なら放っておくかもしれないが、問題が起きたときは最悪の状況を考えた方が無難だ。

「明日帰宅したら山全体に結界を張って、ルッツ様にはテレビ電話で口止めしておこう。明日以降まだ電話の存在に気付いていない場合は、下手に動かない方がいい。宮廷に電話を持ち込むなんて危険だし」

慌てて自ら墓穴を掘っては今後の生活が危ぶまれる。あそこの山は気候が良く、凶暴な魔物もいない。知り合った人たちもみんな気の良い人だ。あそこを手放したくはない。

「理想はあの山に住んで、あちこちに別荘を建てること。私のスローライフは私が守らなくちゃ。ね」

「ギャオッ」

チョコが尻尾をブンブン振った。リルはふわふわの体に抱き着く。

「チョコとののんびりしたその日暮らしが気に入っているんだ。畑もだいぶ大きくなったし。明日からも平和第一でいこう。でも――」

リルがチョコから離れ、立ち上がって北の空を見上げる。

「これでいいのかな。いくらぞんざいに扱われていたからといって勝手に家出して、あちらにバレたのにまだ逃げるのは、ノーバー家の人間に失礼だ」

流れ星が一つ流れる。リルは頷いた。

「うん。ちゃんと、説明しよう。私がリルだって。今後もノーバー家には頼らず一人で生きていくから、捜したりしなくて大丈夫ですって」

次にカラットに会ったらそう伝えることを決意すると、今までの不安が嘘のように晴れた。リルは両腕をめいっぱい伸ばして背伸びする。

「よし、山に帰ったらカラット兄様感知器を作ってこちらから捜そう。ひとまず、今日はおやすみ」

ゴツゴツした岩場の隅に結界を張り、布団を敷く。夜は寒いため、結界内の気温を二十度に設定した。

結界内から外の様子を確認する。こうして外で夜の世界を眺めるのは初めてだ。

「わあ、星がいっぱい」

普段住んでいる場所よりだいぶ北の方にあるからか、もしくは空気が澄んでいるのか、より多くの星が見えた。それを堪能していると、空を黒い影が横切った。

「魔物……？」

鳥にしては大きすぎる。ウォルフのような大型魔物とも姿形が違う。鳥に似た魔物というところか。今活動しているということは夜行性ということだ。肉食かもしれないので、しっかり結界を

張っておいてよかった。
「いくら魔物を追い払える力を持っていても、寝込みを襲われたらまずいからね」
「ギャオ」
「チョコがやっつけてくれるの？　ありがとう。そのときはお願いね」
チョコが尻尾を振ってリルの周りを歩く。護衛をしてくれる相棒に思わず笑みがこぼれる。
「せっかくだから、眠くなるまで散策してみようか」
「ギャオ！」
今まで住処を作ろうと思って探索したことはあっても、目的もなしに夜の散歩をしたことはなかった。頼もしい相棒もいる。明日以降また例の件で気を揉むこともあるだろう。今日くらいは何も考えずだらだら過ごしたい。
「夜行性の魔物いるかな。そういえば、チョコは夜行性じゃないんだね」
今まで自分と同じ時間を過ごしていたので、夜行性かどうかを気にしたことがなかった。出会った当初からそうなので、夜行性ではないのだろう。
草原がどこまでも広がっており、街らしきものは全く見えない。とにかくカラットが追いかけてこないような場所に逃げてきたので、ここがどこなのかは地図を見てもよく分からなかった。
「わ」

少し歩いていくと、光る草が沢山生えていた。しゃがみ込み、観察する。
「花の部分が光ってるんだ。蛍光塗料を塗ったみたいな感じ」
普段いるところでは見かけたことがない。つんつんと触ってみる。特に変化はない。リルは一本だけ抜き、魔法袋に入れた。どこかで役に立ちそうなので、山に帰ったら庭に植えてみるつもりだ。
他にも先ほど見かけた鳥に似た魔物を観察して一緒に空を飛んだり、集団で眠るスライムたちを見て癒されたりした。旅初日からハプニングに見舞われたが、夜は大満足で終わることができた。
「ん～～よく寝た」
両腕を伸ばして体をほぐす。目を開けて体を起こすと、結界を覆うようにして魔物がこちらを覗いていた。
「うわッ」
見たことのないドラゴンに似た魔物から、見慣れたウォルフまでいる。この辺りは人が通れるような道が無いので、人間が物珍しいのかもしれない。
「私のことを食べようとしているのかな」
チョコも初めて対峙（たいじ）した時は敵意を向けてきた。肉食でなくとも人を襲う魔物は沢山いる。この状況は当然と言えば当然である。

「今日も少しこの辺りを見て回りたいから、とりあえずどいてもらおうか」
リルは両手を左右に構え、結界内から外へ魔力を三百六十度に飛ばした。
「ギャオンッッ」
驚いた魔物たちが一斉に去っていく。ドラゴンはまだ小さく、赤ん坊なのかバタバタ慌てた様子で付近を飛び回っていた。
「ごめんね、怪我はしていないはずだから」
しばらくしてドラゴンが岸壁の奥に消えた。リルは荷物を整理して結界を解く。チョコと歩き出そうとしたところで、先ほどのドラゴンが帰ってきた。親ドラゴンを連れて。
「わぁお」
五メートル近くありそうな巨大な魔物だ。カル島の魔物のどれよりも大きい。リルがチョコを撫でながらドラゴンを見つめる。
――私を敵だと認識したってことだよね。どうしようかな。
もともと人間を襲うタイプであれば遠慮はいらない。だが、今回はリルが驚かせたことで起きた。もしも子どもを守るための行動なら命は奪いたくない。
――気絶させるのがいいけど、力加減難しそう。
今までは弱い個体か、強くても倒していいものとしか戦ってこなかった。そのため、怪我をさせないように魔力を調整するなんて、はっきり言って自信がない。そもそも、このドラゴンがどの程度の力か分からない。
「ステータスみたいなものが見られたら簡単なんだけど」
前世で触れた異世界転生ものでは、相手のステータスを見られる主人公が登場した。あの能力があれば、どんな生き物と対峙しても困ることはない。
「……作るか」
今後の開発リストにステータス発現機（仮）を加えておく。
「とにかく、やってみるしかないね」
「ギャオッ」
やる気のあるチョコが前足で地面を蹴って威嚇する。リルも魔力を手のひらに集中させた。
「なるべく致命傷にならないやつだと、水、かな」
「ギャアオオオオオ！」
考えているところに、親ドラゴンが炎を吐き出した。
「ちょうどいいや。シュエイ！」
炎の大きさで相手の力量を測り、それを超える水魔法を繰り出して炎をかき消す。そのまま連続で水を出してドラゴンを覆う。チョコは子ドラゴンの相手をした。





やがて息のできなくなったドラゴンが徐々に弱ってきたため、死ぬ前に水を消した。ドラゴンが力なく地面に倒れ込む。

「息はしている。撃退成功だね」

「ガウッ」

チョコがリルに抱き着く。リルはそれを全身で受け止めた。

「チョコもお疲れ様。ドラゴンが目を覚まさないうちにここを離れよう」

予想より治安が悪そうなので、魔法陣を描かずに飛んで帰ることにした。

昨日の出来事で山の方に三十分程近づいているため、それほど遠くもない。チョコと戯(たわむ)れながら飛んでいたら、魔法袋がピコンピコン鳴り出した。

「テレビ電話だ」

どうやらルッツが山を訪れてテレビ電話の存在に気が付いたようだ。袋から取り出して魔法板をタップする。

「はい、リルです」

『リル！　ロンズ、本当にリルが映ったぞ』

「あはは。ロンズさんもおはようございます」

『おはようございます。朝から失礼いたします』

板には興奮した様子のルッツと、後ろから不思議そうに覗くロンズの姿が映っている。よほど困惑しているのか、ロンズの表情が珍しくて面白くなってしまった。
『このような魔法具は初めて拝見いたしました。どこから調達されたのですか？』
「これは私が作りました」
『貴方が？　さすがです。素晴らしい魔法具ですね』
「ありがとうございます」
ロンズに褒められるとなんだか照れてしまう。
『私にも話させてくれ！』
会話に入れていなかったルッツが画面いっぱいに映る。目と鼻しか見えない。リルが腹を抱えて笑った。
「ルッツ様、もう少し離れてください」
『え、私とは話したくないのか……？』
「近すぎて見えないだけです」
シュンとうなだれる姿はとても一国の皇子とは思えない。それがまたリルのツボに入ってしまった。
ひとしきり笑われて凹んだルッツが弱々しい声で聞く。

『これを宮廷に持ち帰っていいということは、もうこの山には帰ってこないのだろうか……』
「いや、帰りますよ。というか、もうすぐ山に着きます」
『本当か！』
ルッツが上を向いてあちこち捜し出す。これ以上時間がかかると首を痛めそうなので、リルは大急ぎで山に向かった。
五分もせず山に着く。ルッツが両腕を上げてぶんぶん振った。
「おかえり、リル！」
「ただいま帰りました。テレビ電話切りますね」
もう一度板をタップすると画面が消える。ルッツが板を覗き込んで首を傾げた。
「随分凝った造りだ。それに発想が素晴らしい」
「お褒めの言葉、恐縮です」
テレビ電話の発想はリル自身ではない。しかし説明できないのでそういうことにしておく。
「離れた相手の顔を見られるなんて大発明だぞ」
「この魔法具は秘密にしてください。宮廷の方くらいならいいですけど、他の人が見て騒いだら嫌なので」
「分かった。説明書に書かれていたが、これを本当にもらっていいのか？」

「はい。お互いに持っていないと使えないので」
「それなら遠慮なく。ありがとう」
「いえいえ。とりあえず頭を上げてください」
一国の皇子に深々と頭を下げられると少しだけ焦ってしまう。魔法の開発をしているのはあくまで趣味であって、人々に賞賛されるためではない。
「テレビ電話もそうなんですけど、こちらもお渡ししようと思っていて」
魔法袋をごそごそ探り、先日作った人間感知器の受信機を取り出す。ルッツが興味深げにそれを眺めた。
「これは？」
「アディを守るための人間感知器です」
「人間感知器！　本当に作ることができたのか！」
「はい、なんとか。感知器はあの湖近くに設置してあるので、これは正確には受信機です。感知器が作動すると、これがアラートを発するのですぐ分かる仕組みになっています」
皇都にも魔法具の類（たぐい）は存在するが、自然魔法を詰めこんだような簡単なものが多く、複雑なものは珍しい。いくらリルといえどもすぐに作れるとは思っていなかったようだ。
「ありがたい。本当に助かる。対価を支払おう」

「いえ、私の趣味なので」
「いや、その道の専門家が作ったものは、それだけで貴重で価値のあるものだ。テレビ電話も含め、何か礼をさせてほしい」
「うう～ん」
リルとしては友人にお土産（みやげ）を渡した程度の認識だったので、礼と言われて困ってしまった。しかし、ルッツの言い分ももっともだ。
「そうですね。では、物々交換ということで、宮廷で使われている調味料をいくつか頂きたいです」
「そんなことでいいのか？　相変わらず無欲だ。ありがとう、すぐに届けさせよう」
リルとしても、宝石よりも調味料をもらう方が、生活の向上に際して実用的で良い。
「あ、そうだ。聞きたいことがあるのですが」
そう言うとルッツが目を丸くした。
「リルが私に質問だなんて三番隊の時以来だ。どうした、なんでも聞いてくれ」
「う……最近、私のことを聞いてくる人がいなかったか知りたいのです」
三番隊という言葉に反応して逃げ出しそうになるが、ギリギリで耐える。ルッツはロンズを見た。ロンズが首を横に振る。

「いないな。ロンズも知らないらしい。何かあったのか？」
「いえ。何もなければ大丈夫です」
「そうか」
詳細を聞いてこないルッツをありがたく思う。普段はうるさいくらいなのに、黙っていてほしいときはしっかり黙っていてくれる。こういうところが皇族なのだろう。
しかし、安心はできない。昨日の今日だからまだ耳に入っていないだけかもしれない。カラットがまだ周囲に話していないだけの可能性もある。
カラットと話し合うことは決めたが、むやみにリルの正体を吹聴して回りたいわけではないので、ルッツが知る前に早いところ会ってしまいたい。
――カラット兄様とまともに話したこともないから、どんな性格でどういう風に動いてくるかを全然想像できないのが怖いな。
すぐ逃げたのと、遭遇した場所がここから離れているのが幸いだ。彼もリルが皇都横の山にいるとは想像もつかないはず。
――今でさえ目立ちたくなくて変装しているのに、皇都に尋ね人の張り紙でもされたら一生あそこでは本来の姿で歩けなくなっちゃう。
それにしても、カラットがリルを見つけて追いかけてくるのは想定外だった。万が一出会ったとしても、気が付かないか無視するかの二択だと思っていた。何か目的でもあるのだろうか。リルが不在になって被った損害を請求すると言われたら困る。
――損害よりむしろ食い扶持が減って得しているはず。精神的苦痛とか？　いやいや、そんなまさか。でも、請求されたら素直に支払おう。野菜の報酬は残してあるし。
人の噂も七十五日。このまま顔を見ることなく七十五日過ぎてほしいという思いはまだあるが、もうリルは決意したのだ。自分で作り出した壁は、誠意をもってきちんと壊す。
この人生、自分自身の意志で生きてきた。それが初めて、他人の意志により無理やり何かが起きてしまうことになった。しかし、それは当たり前だ。楽な方へ逃げてばかりでは、前へ進んでいるようで後ろを向いている。
「大丈夫か？　具合でも？」
「いえ、平気です。ご心配いただきすみません」
ルッツがおかしな質問をしたリルを気遣い帰宅すると言ってきたので、その言葉に甘えることにした。
「テレビ電話があればいつでも通話できますので。ただ、相手が魔法板の前にいなければタップされないので通話はできません」
「分かった」

「それとこれは少しですけど野菜です。持っていってください」
「ありがとう！」
満足気な笑顔で受け取るルッツの横から、ロンズが袋を差し出してきた。
「こちらはお野菜の代金です。お納めください」
「ありがとうございます……ええッ、こんなに頂けません！」
「妥当な金額でございます。どうかお受け取りください」
「そうですか……頂きます。ありがとうございます」
深々とお辞儀をする。ロンズも目を細めて頷いた。

二人を見送り、部屋に入る。そこで万能薬を渡し忘れたことに気が付いた。それだけ焦っていたのだ。
報酬袋は棚の引き出しに入れた。以前もらったものが残っているのもあり、しばらく使う予定はない。損害賠償を請求されなければ。
「まあ、なるようにしかならないか。兄様が見つかるのがいつになるのか想像もつかないけど、万が一明日出会っても、それなら明日対処する。偶然を恐れていたら、何もできないもんね。偶然の積み重ねが人生だ」

リルはもう一人では生きられない子どもではない。現在、一人で自給自足ができている。もしもこの山に自然災害などが起きて野菜や果物が食べられなくなったとしても、また地球と繋がる「穴」を使って、種や苗から畑を作り直せばいい。
兄から見ればたいしたことのない小娘だろうが、一人で暮らせていると胸を張って説明しよう。
「さっそく魔力感知器ならぬカラット兄様感知器を作らなきゃ」
キース軍との揉め事をきっかけに作製していた魔力感知器を取り出す。これだけでは魔力を使う者全てに反応してしまう。それに、カラットが魔力持ちなのかも分からない。これを兄用に改造する必要がある。
「改造っていっても簡単簡単」
残念ながら写真が無いので、リルの髪の毛を一本取り、これに加えて男性という情報をインプットする。兄妹だから使える作戦だ。
「はい、完成。即席兄様感知器～」
リルは感知器を見つめて考えた。
「どこに設置しよう。皇都に魔法具を置いたりしたら、宮廷魔法士が感づいてスパイだと思われそうだからダメ、か……じゃあ、皇都からちょっと離れたところに。感知器が作動したら私の目の感度を限界まで高めればいいだけだから、一キロ先でもいける」

「よろしくね」
一センチ程の小さな魔法具を空に飛ばす。これなら木々に隠れていれば簡単に見つかることはない。
「……」
腰に手を当て魔法具が見えなくなるまで見送ったリルは、大人しく尻尾を振っているチョコを抱きしめた。
「ふう。なんか緊張してきた。いつ会ってもいいように、兄様に伝えることを考えておかなきゃ」
リルは紙とペンを手に取り、言いたいことを箇条書きにしていった。

・勝手に出ていったことを謝罪。
・もうノーバー家には戻らない。
・兄様に安心してもらうため、今住んでいる場所を大雑把に説明。

「こんな感じか……」
紙を顔の前に掲げ、深呼吸する。長々話しても言い訳がましくなるだけだ。現在進行形で迷惑をかけている相手を待たせないよう、簡潔に、分かりやすく伝えなければならない。

「すー、はあ」
大きく二回深呼吸する。
万が一リルが近くに住んでいることをよく思わない場合は、口止め料としてあちらが望むものを差し出すことも考えている。
貴族でかつ働いている彼にとって、金はいらないだろう。だが万能薬あたりなら喜ぶかもしれない。もともと宮廷軍のために作ったものだからちょうどいい。
「兄様の居場所が分かったとして、どうやって近づこう。一人のときならいいけど、副隊長だから部下がいることが多いかも」
二人きりで話したいが、皇都に出る時は任務中が多いだろう。感知器が作動したとしても、一人かどうかは行ってみないと分からない。
「あれ、秘密裏に会うのって結構難しいね……？」
これまで逃げ回っていたのに、反対に追いかけようとすると難しくなる。遭遇した二回とも三番隊の面々といたので、彼らと一緒にいないときがいつなのか分からない。
「チョコ、どう思う」
「ギャオ」
問われたチョコが後ろ足だけで立ち上がったかと思うと、前足をバタバタさせた。

「もしかして、無理やり捕まえる？」
「ギャオッ」
「そうかぁ、それも手だけど、もうちょっと優しくいってみようか」
チョコが首を可愛らしく傾げる。リルはそれに癒されながら、布団をゴロゴロしてあれこれ考えた。
「でもまあ、無理やりはダメだけど、姿を隠して近づいて、一人になったところで話しかけるっていうのが無難かなぁ」
紙を机に置き、自分の体を観察する。
「変化魔法を使えばいいか。それで、後ろからついていって……」
ここまで考えて、まるでスパイのようだと思った。悪いことはしていないが、後ろめたくはある。
リルはなんとも複雑な気分になった。
「とにかく、兄様との決着がつくまでは、感知器が反応したらすぐ対応できる位置にいないとね」
旅をして各地を回ろうと思っていたが、一旦中断しなければならない。しかし、それも、今後の平穏な生活を守るためだ。
「カル島なら魔法陣で行き来できるから大丈夫。しばらくはカル島を開拓しよう」
別荘としてだいぶ心地好い環境は整ったものの、森のほとんどは手つかずだ。魔物との共生を目指すためにも、迷惑のかからない場所を確認していろいろ遊べるものを作りたい。
「さてと、カル島は明日にして、ちょっと気分転換しようかな」
今まで開発してきた魔法や魔法具をメモした紙をぱらぱらめくる。その一つで手が止まった。
「そういえば、日本と繋げた穴ってこっちがもらうばかりだったけど、向こうに送ることもできるんだよね」
最近使っていなかった穴。もう試すことはないと思っていたが、まだあった。カラット問題も、今日できることはやり尽くしたので夜まで時間もある。それなら今、実行してみればいい。
さっそく穴を出現させて覗いてみる。元実家近くに設置されているので、見慣れた風景が広がった。チョコも慣れた様子で穴から一歩離れて眺める。
「良い景色だね。紅葉（もみじ）だ」
この世界は日本より四季の移り変わりがはっきりしないため、この穴から広がる絵画はいつも新鮮で胸を打つ。
「葉っぱ、一枚頂きます」
赤く染まった紅葉の葉を一枚引き抜く。
「栞（しおり）にしよう」
大事に本の隙間に挟む。それからリルは部屋を見渡して悩んだ。

「人工物はダメだから、どうしよう」
何かを送ることにしたものの、何にするか決めていなかった。庭に出て草や木を見て回る。
「これにしよう」
この山に来た頃、庭に植えた花だ。相変わらず名前は分からない。パンジーに似ている何か。これならあちらの世界でも目立たないだろう。
花を一輪複製して穴に投げ入れる。花は穴からあちらの世界に行き、ぽとりと地面に落ちた。元実家のすぐそばなので、前世の父親が見つけてくれたらいい。
「雨が降らなければ毎日散歩しているって言ってたから、どうかな」
穴を開いたまま本を読みつつ床でゴロゴロしていたら、奥から一人の男性が歩いてきた。穴を草むらに隠して覗く。予想どおり元父親だった。
「お父さんだ」
記憶よりゆっくり歩く彼は落ちている花に気が付き、しばらく見つめた後拾い上げた。それを右手に持ち、もと来た道を戻っていく。おそらく、花を家に持ち帰るのだろう。
「ありがとう、見つけてくれて。それが、私が今生きている証拠だよ」
聞こえなくても、姿が見えなくてもいい。ただ、娘は元気にしているのだと、形にして彼に教えたかった。きっとどのような花で、何故落ちていたのかは彼には分からない。それでもリルは満足

立ち読みサンプル
はここまで

だった。
「あー、よかった。お父さんも栞とかドライフラワーとかにして取っておいてくれるといいなぁ。さすがにドライフラワーの作り方は知らないか」
穴を閉じて、昨日持っていった魔法袋の中身を整理する。リルは綿に似た植物を取り出した。
「これ、調べてみよう」
今まで見てきた植物とは違い、本当に綿が生えているように見える。
「綿花（めんか）ってことでいいのかな。日本と同じ植物があったっておかしくはないし」
これまでも、全く同じとはいかないが、見覚えのある草花を見かけたことがある。これもその一つなのだろう。
「とりあえず複製して、使えそうだったら布団とかクッションの材料にしよ」
作業に集中するため、山の周りにリルの瞳と魔力感知器をいくつか飛ばしておく。これで周囲を気にせず進められる。
前世でも綿花を間近で見たことがなかったので、同じなのかいまいち分からないが、綿花の代替品として使えるのなら問題ない。リルは黙々と作業を続けた。
「おー……作りすぎちゃった」
十分後、目の前には大量の綿が広がっていた。集中しすぎて止め時を間違えた。リルは一人暮ら